

ふじのめ学級実習で他の実習生から学んだこと（2018年 実施分から抜粋）

- ・ 授業のなかでは子どもが「わからない」と素直に言えるのは、クラスの雰囲気、信頼関係ができてからです。担任教師の学級経営の仕方が大切になってくる。
- ・ 他の人の発表のなかで、「一步引いて見る」という話がとても勉強になった。教師が一方的に教えてしまうと、子どもの学ぶ機会を奪ってしまうため、子ども自身で考えさせることが大切だと思った。子ども同士の問題も、子どもたちだけで話し合う機会を設けたり、授業づくりでも問題解決に焦点をあてるのではなく、子どもたちは考えることから、どう学びを深めるかということに意識を向けていきたい。
- ・ 1年生の実習報告を聞いて、やはり発達段階の違いを感じました。1年生には適した指導方法でも6年生には適さない場合もあるのだと学びました。どこの学級に配属になった人も子どものためにどうするべきか、試行錯誤しており、その過程を聞く事はとても勉強になりました。実習を通して至った考え方や応えは様々で、正解はないのだということも感じたが、沢山の人の思いを聞く事で選択肢を増やしておく事が大切だと考えました。
- ・ 私は実習を通して「一人ひとりを見る事が大事だ」と書いたが、その方法にもいろいろあることを知った。その子を「場所、時間を変えて違う角度から見ること」「教師との関わりを見る事」「児童同士の関わりから見ること」など、他の人が経験したことから学ぶ事ができた。
- ・ 子どもにとっては、1日中どの活動も成長するきっかけになる可能性がある。休み時間、授業中、運動会練習、子どもにとって無駄な時間はないと思う。
- ・ 他の学年の実習生の報告を聞いて、それぞれの学年の発達段階の違いと、その対応の仕方の違いを知る事が出来ました。すべての学年において、向上心が強く、雰囲気づくりも、学校にとっては必要な要素であると感じました。
- ・ 通常の学級はクラス人数が多いため、自然とクラス全体の印象で判断してしまうことがある。確かに、一人ひとりを見て行くと、全員がその印象に当てはまるわけではない。クラスの部分と、全体のバランスを見る事は、クラス運営でも、一人ひとりの子どもの理解においても必要な要素だと思う。